

第二百九十三回 青葉会「25周年記念」

平成二十二年八月二十六日(木)午後六時〜九時

丸紅一階レストラン「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生
石川清 伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 小川恭延 小西弘子 朱牟田恵洲
中山芳博 橋口隆 福島正明 山崎亜也 山崎青史 山内天牛

山本三恵(終了間際。投句のみ)

〈投句〉 柿崎忠彦 土谷堂哉 豊田ゆたか 中野一灯 宮内規雄 南平和夫 渡邊盛雄
赤田堅 川口孤舟 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 星田啓子 村田くに子
山本三恵

《選者吟》

祝 青葉会廿五周年

万里子 (紀・弘・正・亜)
全 (そ・恵・芳)

新秋や四半世紀の詩縁謝し

全 (弘・三)

蚊柱の央(なか)に鍵穴探しをり

全 (龍)

帰省路を猿の群跳ぶ夕まぐれ

全

敗戦日なれどテレビは食いっくら

全

朝戸出やみんみん蝉のソ口長し

全

《互選句》

☆ 西日さす書架捨て切れぬ資本論
(恵・龍:「捨てきれぬ」を上五にしたらど)

一灯 (万・そ・弘・恵・龍・敏・芳・正・允・三)

☆ ここだけの話身に入(し)む二人酒

青史 (万・堅・清・そ・恵・正)

☆ 肩先で額の汗ふく郵便屋

天牛 (万・清・猛・孤・恵・青)

☆ 西瓜叩く聞き分け方を知らぬまま
(允:下五)「知らずして」では如何)

恵洲 (允・正・亜・青・天)

☆ 伍長殿卒寿の叔父の終戦忌

堂哉 (万・恵・隆・允・天)

球状の乳房の虚構盆の月

青史 (恭・弘・芳・く・亜)

里芋の熱きを剥きて天日塩

亜也 (猛・敏・芳・啓・青)

☆ 鬆(す)の入りし脳に残暑は容赦なし
(青:新新で面白い表現)

恵洲 (恭・敏・青・天)

☆ 夜半の風そよとグラスの月を酌む
(堅:秀作)

一灯 (堅・そ・孤・龍)

縦書きで旧仮名が好き赤蜻蛉
(孤:一層のこと「旧」を「舊」、「仮」は「假」と表記して貰えば最高)

正明 (孤・く・青・三)

水打ちて秋に灯点す女将かな

清 (堅・猛・く)

☆ 秋立つや地球の火照り冷めやらず

ゆたか (猛・敏・允)

☆ 解体の家の礎石に秋の草

芳博 (万・堅・亜)

☆ 沖繩の球児澁刺終戦日

規雄 (猛・恭・敏)

☆ 薩摩如(こ)つ熊蟬鳴けり寛永寺

亜也 (万・隆・三)

疎(うと)ましやすることも無く夜長と

青史 (清・恭・龍)

身の芯を死神撫でてゆく酷暑

全 (紀・弘・啓)

☆ 思ひ出のメロデーー聴く夜遠花火

天牛 (清・弘・隆)

☆ 嫡子逝く母置き去りに虫の声
海老蔵の「孤忠信」

清 (紀・隆)

☆ 紅隈や汗も吹つ飛ぶ荒き業(わざ)

紀久男 (万・敏)

☆ 秋暑し風に誘はれ川下る

恭延 (孤・龍)

二点

☆ 紅隈や汗も吹つ飛ぶ荒き業(わざ)

紀久男 (万・敏)

☆ 秋暑し風に誘はれ川下る

恭延 (孤・龍)

三点

☆ 疎(うと)ましやすることも無く夜長と

青史 (清・恭・龍)

☆ 身の芯を死神撫でてゆく酷暑

全 (紀・弘・啓)

☆ 思ひ出のメロデーー聴く夜遠花火

天牛 (清・弘・隆)

☆ 嫡子逝く母置き去りに虫の声
海老蔵の「孤忠信」

清 (紀・隆)

一点

☆ 補虫網 札つけたまま孫を待つ
(☆「つけた」は不要)

☆ 落蟬の見るその空の青くあれ
防衛省のレーダーじつと聞く蟬時雨
弘子 (万・垂)

☆ 世話役の汗の継ぎたる名句会
全 (隆・正)

☆ 身辺整理思ふて手付かず秋暑し
恵洲 (正・啓)

☆ 音やよし足も気も急く火花かな
堂哉 (猛・芳)

☆ 秋草を左右に分かつ犬の道
芳博 (万・啓)

☆ 何もかも忘れて喰ふや泥鰌(どぢゃう)編
隆 (紀・天)

☆ 脱け出せぬ固定観念模植(かりん)の実
正明 (孤・く)

☆ ときめきはときめきのまま酔芙蓉
青史 (孤・恵)

☆ 猛暑には喧嘩出来ぬと農夫云ひ
天牛 (紀・恭)

☆ 季寄せ手に移ろふ夏を拾ひけり
全 (允・く)

☆ いくつかの予定に逡巡秋暑し
盛雄 (允・く)

☆ 蝉しぐれ英霊集ふ九段坂
三恵 (紀・允)

☆ 草も木も伸び疲れたる暑さかな
そらお (清)

☆ 終戦日庭に残りし防空壕
全 (芳)

☆ ひと切れの西瓜分け合ひ笑み浮かべ
清 (堅)

☆ 老鶯やのろけ聞かざる喪の妻に
紀久男 (垂)

☆ この一瞬命を懸ける蟬時雨
猛 (堅)

☆ 葉を揺らす風も祈るや原爆忌
恭延 (清)

☆ 核なしの空澄み渡れ原爆忌
全 (啓)

☆ 船上に秋暑忘れて最上川
全 (龍)

☆ 父も子も携帯ゲーム夏休み
忠彦 (万)

☆ ソーダ水首を傾げて無心して
弘子 (三)

☆ 遠山に立つ雲崩れ夏了る
ゆたか (啓)

☆ 蟲の音に耳そばだてる朝寝かな
隆 (青)

☆ 朝飯に心太喰ふ今年かな
全 (天)

☆ 早蟬も大合唱も耳の奥
和夫 (そ)

☆ 宿題やつくつく法師うるさいぞ
規雄 (天)

☆ 青しるきガーデニングの牽牛花
亜也 (紀)

☆ 食卓の檸檬に絵心動きけり
全 (三)

平成二十二年八月句会（25周年記念）

一、昭和60年（1985）8月に第一回の句会を催してから四半世紀。創立者で指導者でもある川合絹瀬先生が亡くなられてからは奥様の川合万里子先生にご指導を頂いております。会員の出入り移動はありますが常時30余名の人数です。御多分に洩れず高齢化し現役社員は居りません。各人の技芸を磨くよりも親睦面が強すぎる傾向を指摘する向きもあります。「呑兵衛句会」の異名も久しいものがあります。句会終了する迄飲む飲まないは各人の自由で制約ありません。今迄運営に支障を来したことございませんし、俳句に精進されておられる人のお邪魔になつていないと思ひます。

来春300回を迎えます。記念の合同句集を企画しておりますが、何とかレベルの高い句集となりませう願つております。

各位には尚一層の奮励努力をお願い申上げる次第です。

二、今回は久しぶりの正明さん青史さん含む15名出席。投句7名。欠席者から25周年祝辞（盛雄さん堅さん龍平さん姐夫さん規雄さん等）くに子さんの「俳句と絆」（真下ますじさんの句と真下玲子さんの絵）永田美智子さん（明彦さんの妹さん）からのお手紙、孤舟さんからの『遠嶺』小澤克己追悼・終刊号、小生の『楽屋句會』を回覧しつつ祝杯を挙げました。

先生手造りの五平餅と漬物、弘子さんの「久保田」萬寿、恭延さんの「越の寒中梅」、恵洲さんの「澤乃井」、亜也さんの「水尾」「天の戸美稲」、堂哉さんのチリ赤ワインと甘納豆、小生の「吉田蔵」（浅草の飯田屋より）等々盛り沢山の寄贈あり、一寸飲みすぎの感ありました。

弘子さんの司会で順調に進行。御覧のように新人の一点灯さん（龍平さんの友人）、ペテランの青史さん、恵洲さんが高得点でした。

三、関係者近詠

映え合へる新緑常緑九十九折り
祝 萬緑賞 鈴木胡桃子氏
胡桃生きる桃源郷の子規
叔母の訃報麦湯滾りてガス火消ゆ
朝食に朝刊添へて紫蘇香る
ハーブ畑に新種が育ち夏の蝶
紫陽花の色濃くなる頃妻手術
真屋間の森閑として蟬時雨
日野草なにごともなく今日も暮れ
椋鳥の群空騒がして収まりぬ
お陽様にお取り願はし夏休み
今日も蚊に返り討たるる夫婦かな

虫送り瑞穂国の今むかし
秋麗の朝や駿馬の咀嚼音
秋天を拭くわが心透けるまで
柘榴裂け千の秘密の小屋屋かな
黎明の海秋風の舟ひとつ
天馬（ベガサス）の渚を駆くる月夜かな
恋さへも病歴のうち秋の浜
積年の父子のずれや蟬時雨
蛸船の瀬戸に揺蕩ふ雲の峰
何も知らぬそんな顔して八月来
昭和とは筆筒の底のあっぱっぱ
釣鐘草記憶の笹の洩れやまず

奥西邦夫

孤舟

全

全

全

全

全

全

全

全

全

平成二十二年九月十一日

紀久男記